同窓会会報
第28号
昭和54年10月8日発行
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
印刷所
㈲双葉軽印刷所

三十周年記念事業
同窓会館の設立達成

学園創立三十周年記念事業として、取り組んでまいりました同窓会館の建設は目標をほぼ達成して、事業の完結をみようとしております。

昨年四月の大会決定であります「同窓会館の充実と未払金の処理をはかるため事業を経続する」にそって、事業を推進してまいりましたが、皆様のご協力と基本金会計からの繰入れとによって、未払金の支払いを全て済ませ、本会の責任を果すことができました。

最終的には、大会の決定をまたなければなりませんが、去る七月、常任委員会が開催され、検討の結果

一、特別会計の不足額については、同窓会館の設立を目途として設置された基本金会計（入会金）から繰入れる。

二、庭園の整備をすすめる必要があるが、記念事業が長期に亘っており、未払金の支払いも済ませ、会の責任が果せたことから庭園問題は記念事業と切り離して別途に考える。

として記念事業に終止符を打つことになりました。

昭和五十四年九月十日現在の記念事業特別会計中間報告は、一～四表の通りであります。尚、既報の同窓会館諸施設のうち室内備品の明細は表五の通りです。

記念事業をしめくくるにあたって、ご協力いただきました皆様に対し、記念品等を配布して、感謝と協力の証しを立てる。このことは、支部にあって、労をいとわず事業の推進にあたっていただいた役員から要請がありました。執行部といたしましても、かねがね検討いたしてまいりましたが、記念事業特別会計、一般会計の状況からするとその余裕がなく、特に一般会計の支えともなっていた、基本金会計からの繰入れを考慮し、断念せざるを得ませんでした。何卒、この件につき深いご理解を賜りますようお願い申し上げます。

省りみると、記念事業を推進するにあたって、当初計画の規模縮少、工事の見切り発車、未払金の増大等、同窓会の性格とも絡んで不安の連続でありました。しかし乍ら会員各位のご協力によってその不安も解消し、本会の力で同窓会館を建設することができました。この現実は農民教育協会役職員は勿論のこと、鯉渕学園を支援する関係機関各位から高く評価されております。

同窓会館開館次来一年余、同期生会をはじめ個人的な利用も日をおって増加してまいりました。第二の故郷に安心して泊れる宿がある。東京から急行で約一時間半、出張の合間や帰りに、リクレーションの基地に、ゆったりした気分で会館をご利用下さい。

鯉渕学園同窓会大会の開催

第14回、同窓会大会を下記により開催いたしますので、ご出席下さい。

昭和54年10月8日

鯉渕学園同窓会会長
和田　文雄

会員各位殿

記

日程、場所

11月3日　13：00～13：30　受付　同窓会館
　　13：30～17：00　大会　〃
　　17：30～20：30　懇親会　〃

議　題
1．昭和53・54年度事業報告並びに決算報告承認の件
2．昭和55・56年度事業計画並びに予算案承認の件
3．役員選出の件

参加費
1．大会参加費 1,000円
2．懇親会 2,500円
3．宿泊費 1,000円
4．同窓会会費（昭55・56）2,000円

3,000～6,500円

恩師の御逝去相次ぐ

前号では、鞍田名誉学園長が急逝されたことを報じ、共に先生の御冥福をお祈りしたばかり、続いての悲報を記すことに、いいしれない重苦しさを感ずる。今はなき両先生の御冥福を祈りながら

山添理事長御逝去

昭和三十四年から、農民教育協会理事長として、わが鯉渕学園を支えてこられました山添先生は、一昨年、脳溢血で倒れられ、手術の結果快復に向いつつあるとの報せに接しておりましたが、期待もむなしく、去る七月七日、永眠された。

葬儀には、本会を代表して和田会長が参列し、先生の御冥福をお祈りした。

秋浜前学園長御逝去

数年前から、病気後静養中でありました、前学園長秋浜清三先生（農民教育協会理事）は、七月十五日に永眠されました。七月十七日には、葬儀がしめやかにとりおこなわれ、本会を代表して和田会長が参列し、次の弔辞を御霊前に捧げた。

「謹しんで秋浜先生の御霊に申し上げます。先生が鯉渕学園学園長に御就任され、学園の教育、経営にあたられましてから、すでに十年の才月がたちました。そして今日、先生にこうしてお別れの言葉を申し上げることになりましたことは、私たち同窓生にとって本当に残念でなりません。

先生が御赴任された四十五年は学園にとっては、一つの転機にたたされていた時代でありましたし、在学の学生は先生の着任を千秋の思いでお待していました。

先生は鯉渕の土地ははじめてだが、鯉渕学園ははじめてとは思えない。それは鯉渕の卒業生と一緒に働いてよく知っているからだといっておられました。

北陸農試の開設の時代は職員として、北海道内きっての酪農家としての卒業生が、先生に学園の教育、経営に没頭させてしまう何かを持っていたのでありましょうか。

学園で最初に手がけられた学科の変更に伴う教科課程の改正は、大きく変ってゆく農業と農村社会の中にあって農業と農村生活の改善発展のための中核として指導的役割を果たす人材として、高い技術、遠大な洞察力、優れた組織力そして自ら汗してたゆまぬ逞しい実践力を養うことを目標とした教育時間の設定でありました。同時にこの教育を行うに必要な教育施設の充実整備でありました。

先生が心血を注いで農林省、大蔵省に要請された基礎実験室、園芸、畜産の実習室、そして松の林の隣の女子寮は今日も学生たちが使っていることでありましょう。そして待望の学生会館も今年三月に完成したところであります。

六千平方米に及ぶ大型ハウスは、一体経営ができるだろうかと心配されましたが、今では近在の青果市場にとっては青果物の供給地として欠かせぬものとなっております。

またその頃、学園財政は最大の危機にありました。多くを国からの助成によってまかなってきていましたが、農場収入によって学園の経営を行うようにとの意向もあって、それまで雑木の茂っていたところを開墾し水田をつくり、果園をつくり、乳牛を倍に増すなど最も収益の低い農業によって学園教育の経営を樹立しようとこの大胆な、あまりにも無謀な実践に敢然ととりくまれ、そして成功したのであります。

先生は、このことの労苦について一言も語られませんでしたが私たちは知っていました。先生が「高田や札幌のあの寒さの中で使っていたストーブをいくら焚いてみても少しも学園長舎宅は暖たまらない」と申された言葉の中から。

先生、私たちはそのストーブの火を戴きその火の燃えつきることのなく、日本中の農業の中に燃え広がり、寒かった先生を、そしてすべての日本人の心も体も暖めることができるよう努めてまいりたいと存じます。

先生、古稀を迎えられてからのあの大手術このとき先生は「若い学生の血をもらったからまた、若返ったよ」といわれておられました。

一時は小康を得られての学園卒業式への御出席はかえすがえすもとりかえしのつかないこととなってしまいました。

こうして今、先生の御霊前に全国の卒業生とともに、学園の教育と経営にお尽し下されたお礼を申し上げ、その教えを学園の伝統の一つに受け継きこれからも農業の発展のため尽すことをお誓い申し上げます。

願わくば、天上にあって私たちにあのほほえみをもってお導き下さい。

今、先生との長いお別れにのぞみ御冥福をお祈り申し上げて弔辞といたします。

昭和五十四年七月十七日

鯉渕学園同窓会長
和田文雄

昭和54年度　国庫助成による学園諸施設の整備

名称	規模	金額
1．排水処理施設		9,600,000円
2．学生集会室	108.1M²	11,450,000
3．畜産実習教室（含備品）	240.0	21,074,000
4．養豚施設（含設備）	274.4	14,630,000

上記の通りの国庫助成があり、近く完成の予定です。

鯉渕学園同窓生の皆様へ

畜産担当　中野光志

この誌面をおかりしまして、同窓生の皆様に御挨拶させていただきます。

私は本年四月から、学園に奉職することになり、すでに六月には三年生諸君の特研旅行で岩手県内の先輩諸氏に大変御世話様になっています。

学園生活も、はや半年が過ぎ何事も未経験の連続でして、特に藤田（嘱託教授）先生をはじめとします、諸先生方に一方ならぬ御指導を仰いでいます。とりあえず畜産コース二年生の「家畜衛生」を担当し、三年生の経営演習に立会い、酪農場では人工授精の基礎実習として、直腸検査をマンツーマンで実際に子宮・卵巣に触れさせ実感を持たせる仕事を行なっています。

学生諸君や私の周辺の人達から学園に奉職するようになった動機は何かと質問されます。そこで、私の自己紹介を含めまして、私と農業とのかかわりあいを述べ、この私への学園での方向づけのために、同窓生の皆様方の御指導と御鞭撻の程を改めておねがいします。

昭和三十二年に、初代学園長小出満二先生が学校長をされた東京高農が新制度で改名した農工大の獣医科を卒業しました。当時の社会情勢は現在と相似した不況期でして、先輩の配慮をえて、ようやく千葉県の農業共済連の家畜診療所に採用され、農村生活を送ることになりました。農学科の学友達は失職の状態にありながらも、農学を学んだ以上自ら農業をやるんだと情熱を燃やし、最近の新聞にも報道された島根県三瓶山の「学士開拓団」のプラン作りに熱中し、私自身も参加する気分でもありました。彼らが三瓶で開拓を続けているときに、私は三十八年から農業構造改善事業の一環として成田市豊住地区パイロットファームの建設に参加することになり、農協への出向職員となり、酪農場・養豚場・ライスセンター等の設立や運営資金の調達等、農協活動を身を持って学びました。家畜診療業務すら若輩の身であって、ましてや乳牛の導入に際しては毎日の金利が数万円に達したことに脅威を感じたり、ビートパルプを大量買付けたところ容積までは頭が働かず、現物が次々到着し始めて収容場所がない、まことにおそまつな学農指導員でした。

成田のパイロットファームでの協業構成員の人間関係から周辺住民とのからみ合い等、広範な人間模様は、確かに関係者諸氏には多大の犠牲が強いられましたが、私にとっては誰よりも貴重な実践的農業の姿を体験できました。学生時代にも鯉渕学園の存在を農ゼミ等で耳にしてましたが、協業酪農場に給食センターが誕生し、組合員への給食が開始された頃、学園生の見学があり、てきぱきと質問され、感心させられた事を記憶しています。その後協業員の娘さんが学園に入学し、このころから学園との機縁が芽生えていたように思えます。

協業酪農建設当初に利根川河川敷に牧草を栽培し、乳牛導入が思うにまかせず、刈取った生草を専業牧場に販売しました。生草売買の経験はなく、専業独得の商取引に悩まされましたが、ずらりと体型の揃った200頭の搾乳牛の姿に圧倒され、専業地区の獣医師に畏敬の念をいだき、ふりかえって農民的酪農への気概を新たにしました。協業酪農も二人で1300kgを搾るまでに成長し、その間私は大学院で飼料分析に通ったり、協業婦人部と三瓶の開拓地を訪問したり各地の普及所の御世話になりました。

十年前に生草を売りに行った専業牧場地区の診療所長として勤務することになり、悩まされた牧場主達と再会しました。すでに一般酪農の下請けで支えられていた「一腹搾り」の経営も斜陽で、酪農本来の飼養管理が注目され、近代的施設としてのパイプラインやパーラー、マニアスプレッタ等具体例での相談にあづかる立場になっていました。

また牛乳は白ければ売れた時代から、品質で勝負する時代を迎え、専業地帯では特に乳質に潜在的な格差が認められ、私の観点も臨床症状以前の潜在性へと「予防」を主とする乳質向上へと、乳房ばかりをいじる－H－先生になっていました。幸い「牛乳中の体細胞に関する衛生学的研究」で獣医学博士号をもらい、ライフワークとして乳質問題にさらに取組まねばならなくなりました。

鯉渕学園には全国の農村青年が三年間の寮生活を送り、実践的農業を背負って立つべく集団生活を通して100頭の乳牛を相手に勉学と実習がくりかえされています。学生時代にあこがれた「蜂蜜と乳の流るる里」の実現の可能性を秘めた学園に期待し、私とともに農業に接し卒業する学生諸君が十年・二十年先に、彼らの楽園を築き後日訪問した私を歓迎してもらえる－先生－になるべく勉めること、これが現在の心境です。

（秋の長雨の中で酪農場職員と学生諸君の夜間奉仕によって、刻々変化する乳質の基礎的データを測定収集し、来春の学会には「鯉渕の里」から発表すべく取組んでいます。）

お願い

鯉渕学園学友会の会報として、発行された「学園通信」について、学園で保管しているもののうち、第十六号が欠けております。卒業生の皆さんの中で、お持ちの方がございましたら、是非お貸し下さい。

鯉渕学園

五期会開催さる

九月十五日午後から十六日の午前にかけ、同窓会館に於いて、卒業三十周年を記念する五期生会が開かれた。

第五期生会　卒業二十周年記念　S54.9.15

出席者は、来賓として吉川学園長並びに学生当時の恩師、同期生は三十九名で北は青森、南は宮崎までの各地から参集された。

第一日は、十三時三十分から十五時三十分まで記念集会、十五時三十分から十七時まで学園内を視察、十七時三十分から二十一時頃まで、会場を内原町湯泉荘に移し懇親会。

第二日は、七時、学生当時を偲び、全員、学生食堂で朝食、その後は、正午過ぎまで、自由な懇談や学園内の探索がおこなわれた。

記念集会での取り決めは、一、学園に記念樹を寄贈する。(樹種は学園と相談の上決定、五万円相当)二、今後、五年間隔で同期生会を開く、会場は鯉渕学園とする、であった。

久し振りに会った顔顔は、生き生きとして笑いに満ち、短時間のうちに生気をとりもどし、若きに溢れて各地に散っていった。

故鞍田純先生『偲ぶ』について

鞍田純先生著作論文目録編集委員会では、昨年十二月『偲ぶ―鞍田純先生の遺稿と著作論文目録』(全二四〇頁)を発行しました。

本書は先生の学園葬参列者に配る目的で発行しましたが、その後、個人的な希望者も多々あって本年三月に再版したものです。内容は第一部　鞍田先生の面影を偲ぶ　第二部　鞍田先生の講義を偲ぶからなっており膨大な鞍田先生の著作論文目録も含まれています。購入希望者は図書館にご連絡頂ければ郵送料込みで千六百円で頒布しております。

また、この著作論文目録作成の過程で先生が晩年力をこめて講義された「農村生活総論」の原稿が発見されたことは本紙上でご報告申しあげましたが、東大名誉教授神谷慶治先生のお骨折りも頂きまして来年三月をめざして出版の努力がなされております。以前購入希望された方には追ってご通知申しあげます。希望者は学園宛お申し込み下さい。

鯉渕学園内鞍田純先生著作論文目録
編集委員会

新刊紹介

石橋幸雄著　鯉渕学園

―戦後農業の軌跡を刻む―

ご承知のように、石橋幸雄先生は昭和二一年、全国農業会調査部長から鯉渕学園教授としてご着任、爾来約三十年、農業経営の講義を担当されるとともに、次々と学園の教育、運営の要職を歩ねられ、昭和四二年には副学園長として創地の学園再建にご尽力下さいました。また、学究としての先生も周知のことで、農学博士の学位を授与され、著書・論文も数多くございます。昭和四八年、学園ご退職の後も、名誉教授として特別講義をお引受下さり、先年はヨーロッパ、次いでソビエト、最近はアメリカの視察に参られました。

表記の著書は鯉渕学園の三十年史、詳しくは同封の別刷をどうぞ。皆さんは勿論、一般の方にも是非ご一読をお勧め下きるようご紹介致します。書店では入手できませんので、ご注文は早速同窓会事務局まで。

(事務局)